

富山大学平成 30 年度卒業論文

孤立化を防ぐ氷見市社会福祉協議会の取り組み
— 独居高齢者を視点として —

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース 社会学分野
学籍番号 11510102
氏名 寺林日菜子

〈目次〉

第一章	問題関心と調査概要	1
第一節	問題関心	1
第二節	富山県氷見市の概要	2
第三節	調査概要	3
第二章	氷見市社会福祉協議会の概要	5
第一節	地区社会福祉協議会の設立と整備	5
第一項	氷見市社会福祉協議会の基盤づくり	
第二項	氷見市社会福祉協議会事務局通信の発行	
第三項	生活支援地域福祉活動推進モデル事業	
第四項	第1次氷見市地域福祉計画・第1次氷見市地域福祉活動計画の策定	
第二節	ふれあい型地域活動の展開	7
第一項	シルバー談話室	
第二項	ふれあいランチサービス	
第三項	個別支援型福祉活動への展開	9
第三章	氷見市における活動の事例	11
第一節	朝日丘地区ふれあいランチサービス	11
第二節	上庄地区ふれあいランチサービス	13
第三節	仏生寺地区ふれあいランチサービス	14
第四節	安否確認事業（配食サービス）	15
第五節	ケアネット活動	16
第四章	分析と考察—活動実態からみえる氷見市の特徴—	17
第一節	独居高齢者の対するふれあいランチの効果	17
第二節	行政と市社協・地区社協の相互協力	18
第三節	まとめと考察	19
	参考文献・URL一覧	20
	巻末資料	21

第一章 問題関心と調査概要

第一節 問題関心

近年、日本ではますます高齢化が進み、高齢者の単独世帯が年々増加傾向にある。平成 30 年度版高齢社会白書によると、2015 年現在、65 歳以上の高齢者のいる世帯数は 2372 万 4 千世帯と、全世帯（5036 万 1 千世帯）の 47.1%を占めている。日本の独居高齢者の数は、2015 年現在で男性約 192 万人、女性約 400 万人、高齢者に占める割合は男性 13.3%、女性 21.1%となっている（内閣府 2017）。

高齢者がひとり暮らしであることの問題点として、松成（2004）は加齢に伴う問題として、「身体機能の衰え、行動範囲の縮小、友人、知人、きょうだいの死など、人間関係の範囲も縮小も余儀なくされる」ことや「加齢に伴う人間関係の範囲、行動範囲の縮小」を指摘している。また、廣瀬他（2009）は「話す相手がいないことによる寂しさや孤独感、生活のはりの低下」を指摘している。

以上より、加齢とともに身体機能が衰えることによって生活範囲が狭くなり、引きこもりがちになったり、人間関係が狭くなり孤独感を感じる事が問題とされていると考えられる。

このような状況のなかで、独居高齢者に対する取り組みは実際にどのように行われ、どれほど独居高齢者の支えとなっているのか。本研究では、氷見市の配食と会食を対象に独居高齢者支援の実情と成果、課題を探っていきたい。特に配食と会食に注目する理由は、後述するように氷見市においては社会福祉協議会が地域福祉体制を推進してきたのだが、その中で配食や会食を含む対面的な機会が住民のかかえる問題やニーズをとらえるうえで重要な位置を占めるのではないかと考えたからである。

第二節 富山県氷見市の概要

氷見市は富山県の西北、能登半島の東側付け根部分に位置している。市域の大部分は山々に囲まれているが、富山湾に面した 20 km に及ぶ海岸は国定公園に指定されており、海岸線からは海原遥かに雄大な北アルプスが一望できるという、豊かな自然に恵まれた地域である。

市の総面積は約 230 ㎡で海岸線に位置する市街地を中心に、手の平のようにいくつもの谷間に沿って集落が点在し、これが農村地域を形成している。この農村地域は石川県境にある丘陵地帯にまで広がっており、多くの中山間僻地を抱えているという地理的な特徴がみられる。

氷見市内には 226 区の自治会があり、小学校が 12 校、中学校が 3 校ある。また、旧小学校区を単位に 21 の地区社会福祉協議会が組織されており(巻末資料参照)、小地域ごとに地域特性や住民のニーズに合った地域福祉活動が住民主体により展開されている。

平成 29 年度版氷見市社会福祉協議会の資料によると、氷見市の人口は平成 29 年度現在 48,825 人(男性 23,296 人、女性 25,529 人)である。そのうち高齢者人口は 17,938 人で人口の 3 分の 1 以上を高齢者が占めている状態である。人口は 1985 年頃から毎年約 500 人ずつ減少しているが、逆に高齢世帯数は毎年 50 世帯程度増加している。このことは全国的な傾向でもある少子化と核家族世帯化が主要因と考えられているが、中山間地域が多いという氷見市の地理的な特徴にも深い関わりがある。現に中山間地域では過疎化が進行しており、高齢者が 50% を超える地域も見られ、それらの地域ではひとり暮らし高齢者や高齢者のみの世帯がここ数年で急激に増加している。

第三節 調査概要

氷見市におけるひとり暮らし高齢者への取り組みについて探るために、氷見市役所福祉介護課と氷見市社会福祉協議会、民生委員にそれぞれインタビュー調査を行った。また、朝日丘地区と上庄地区で開催されているふれあいランチサービスへのフィールドワークを行った。概要は以下のとおりである。

第一回インタビュー調査

実施日：2017年11月30日

場所：氷見市役所

インタビューイ：蔵田君予さん（氷見市役所福祉介護課主査）

内容：ひとり暮らし高齢者への支援について（主に安否確認・配食サービス、ふれあいランチについて）

第二回インタビュー調査

実施日：2018年1月11日

場所：氷見市いきいき元気館

インタビューイ：開上滉己さん（氷見市社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア推進課）

内容：ひとり暮らし高齢者への支援について（シルバー談話室、ふれあいランチについて）

第三回インタビュー調査

実施日：2018年11月30日

場所：氷見市役所

インタビューイ：龍塚小織さん（氷見市役所福祉介護課）

内容：配食サービスについて

第四回インタビュー調査

実施日：2018年12月17日

場所：まちなかサロンひみ

インタビューイ：村上美奈子さん（朝日丘地区民生委員）

内容：ふれあいランチサービスへの関わり方について

第五回インタビュー調査

実施日：2018年12月18日

場所：いきいき元気館

インタビューイ：木下久美子さん（仏生寺地区民生委員）

内容：ふれあいランチサービスへの関わり方について

第一回フィールドワーク 朝日丘地区ふれあいランチサービス

実施日：2018年2月22日 10:00～12:10

場所：光源寺

第二回フィールドワーク 上庄地区ふれあいランチサービス

実施日：2018年8月26日 8:30～12:50（ふれあいランチ 11:00～12:30）

場所：上庄公民館

第三回フィールドワーク 仏生寺地区ふれあいランチサービス

実施日：2018年12月12日 9:00～12:30

場所：寺中公民館

以上がインタビュー調査、フィールドワークの概要である。フィールドワークは、ふれあいランチの食事の用意を業者に委託している地区、ボランティアが用意する地区、参加者が用意する地区の三つを対象として調査を行った。

第二章では、第二回インタビュー調査の際に提供を受けた「平成29年度版氷見市社会福祉協議会の概要」をもとに、氷見市社会福祉協議会について詳しく述べていきたいと思う。

第二章 氷見市社会福祉協議会の概要

第一節 地域社会福祉協議会の設立と整備

第一項 氷見市社協の基盤づくり

平成 29 年度版氷見市社会福祉協議会の概要によると、1981 年当時、社協は社会福祉事務所の一角に机が二つだけという、市に間借りしていた状態であった。そのような環境の中、当時の常務理事（社会福祉事務局長）が全社協の研修に参加し、刺激を受けて戻ってきた際、「氷見市の社協は遅れている。計画を作って展開しなければならない」と感じ、当時の氷見市社協の課題であった財源・拠点・人材を掲げ、第 1 次基盤強化計画を策定した。この計画を策定することにより、市社協の役割に対する役員の理解も浸透し、役員自身が拠点整備のための寄付金集めを率先して行うと同時に、市の全面的な支援の下、建設財源及び敷地を確保した。

また、1982 年に富山県助成事業「地域福祉推進モデル事業」の指定を受けた。第 1 次基盤強化計画を策定し、具体的な取り組みに着手していたこの時期よりも以前から、氷見市社協の事業計画には「地区社協の組織化」が挙がっていたが、事業報告ができるほど具体的な取り組みを実施していなかった。計画によって少しずつ進みだした氷見市社協の次なる取り組みとして、この地区社協の組織化を進めることになった。その結果、住民への理解も広がり 1985 年には市内宮田地区での地区社協設立へとつながった。同様の手法で氷見市社協の独立事業として、さらに 2 地区でも地区社協の設立が実現した。加えて 1987 年、1988 年に「ボランティア事業」の指定を受ける。住民懇談会や福祉講座の開催、地区社協設立の手引きの作成、配布、市民意識の調査などに取り組み、全市的に地区社協を設立させる動きが加速した。そして 1990 年には、市内 21 地区に地区社協が設立された。

第二項 市社会福祉協議会軸局通信の発行

1988 年より「事務局通信」を発行し、身近な話題を掲載し関係機関へ提供した。その結果、行政機関から「市社協はこういうこともやっていたのか」と理解してもらい、同時に声をかけてもらえるようになった。この動きが、後の計画づくりや様々な事業を市と共同で取り組むきっかけとなった。

第三項 生活支援地域福祉活動推進モデル事業（1990 年～1992 年）

平成 29 年度版氷見市社会福祉協議会の概要によると、これは厚生労働省のモデル事業で、市民の抱える生活上のあらゆる問題を解決し、その世帯の生活の安定、維持向上を図るための援助活動を、相談から解決まで社協職員が関わり、関連機関と連携し、個別ニーズを解決していく体制を確立することを目的とした事業であった。生活支援というものは、地域で住んでいる人たちに生活問題があっても、制度だけで解決はできない。そうなると必然と地域住民たちが支え合う活動が重要となってくると考え、地域では「地区社協の組織化」を進め、福祉に対する理解と関心を高めていくのが当時の目標だった。この抽象的な目標に対して、

「個別課題を抱えた世帯の実態把握と支援の展開」を考えることが生活支援地域福祉活動推進モデル事業の達成目標だった。この事業を通じて、市社協の職員として、ソーシャルワーカーとしての力量を身につけていった。それと同時に、関係専門職との連携を合わせて、地域住民との連携を通じて「総合的な自立生活支援の実現」を目指すための一つのシステムを築くことが可能となった。

第四項 第1次氷見市地域福祉計画・第1次氷見市地域福祉活動計画の策定

平成29年度版氷見市社会福祉協議会の概要によると、行政役員、保健師、ホームヘルパー、福祉施設役員、社協職員など現場で活動している職員でプロジェクトチームを結成。それぞれが持っている事例を持ち寄り、どんなニーズがあり、どのような解決策があるかを1年かけてはなしあった。また、小地域単位の住民懇談会を開催。行政職員と市社協職員が一緒に出掛けていき、住民が抱えている課題を聞き出すことはもちろん、それぞれの地域に合ったニーズ把握の方法を行政職員と検討した。

計画づくりを共同で行うことで、その後の医療とのつながりを含め、個別支援における福祉と保健の連携強化につながった。また、施設職員がチームに入ることで、従来は「施設福祉」「在宅福祉」と空間割りの展開を考えがちになっていたところが、地域福祉を土台として、在宅と施設のつながりから本人や家族をどう支援するかという視点で取り組みを検討できるようになった。

第五項 原田（2014）からみた氷見市社会福祉協議会の特徴

原田（2014）では、地域福祉計画の構成要件とシステム構築について氷見市と長野県茅野市、三重県伊賀市との比較を行った。氷見市は市町村合併の影響、市長や社協会長の交代、行政と社協の関係性、社協職員の世代交代、地域住民のリーダー層の交代、また地域ニーズの変化、介護保険制度の導入など社会福祉制度の変化、少子高齢化や人口減少の加速化といった様々な課題を乗り越えながら地域福祉を推進させてきた市として取り上げられている。

原田はその中で「氷見市では行政からの補助金を受けずに財政的にも独立した社協経営を目指してきた。計画も地域福祉計画と地域福祉活動計画をそれぞれ連携させながらも、別々の組織として策定してきた経過がある。相互の緊張関係を保ちつつ、地域福祉は社協主体で推進されてきた。そこに加えて地区社協が重要な役割を果たす力をつけてきたことから、氷見市の地域福祉は行政、市社協、地区社協の三者関係でとらえられなければ全体構造が見えてこない」と述べている（原田 2014：159）。氷見市の福祉活動は行政、市社協、地区社協がそれぞれ独立して役割を果たしているという特徴があることがわかる。

第二節 ふれあい型地域活動の展開

こうした流れの中で、地区レベルにおいて住民が抱える問題やニーズを発見し把握する対面的な場が設けられるようになった。

第一項 シルバー談話室

シルバー談話室とは、65歳以上の独居高齢者や70歳以上高齢者を対象に、在宅高齢者の閉じこもり予防と生きがいがづくり、要介護高齢者の発見を目的として1994年に開始した活動である。

氷見市社協では「地域福祉総合センター」を開設して、地域内の社会資源と連携を取りながら市民生活の問題解決にあたっていたが、その多くは高齢者介護や認知症の問題であった。ある相談者は「昼間だけ預かってもらうところさえあれば、姑の面倒を住み慣れた家や地域で最後まで看ることができると」という願いを持っていたが、当時の氷見市にはデイサービスセンターもなく在宅福祉サービスの整備が課題となっていた。このような問題を解決するためにはデイサービスセンターなどの整備とともに、認知症高齢者やその家族を温かく見守ろうという、地域住民の理解と地域の支援システムの構築が重要な課題であると考え、「シルバー談話室事業」が企画された。

このシルバー談話室事業は、地域住民が歩いて通える範囲内の小地域ごとに、高齢者が気軽に集える場として地区公民館などを利用し、高齢者相互のふれあいや生きがいがづくりを目的に活動を展開するものである。当初はモデル地区を指定し、数年かけて全体的に広め、現在は地区社協を基盤として30か所を超える小地域で活動が継続的に展開されている。

活動頻度に関しては地域によって異なるが、たいていは2か月に1回のペースで行われている。多いところで1回に集まる参加者は60～70人程（例：東地区の年間参加者数400人程度）。これに関しても地区によって差がある。活動内容としては、氷見市の包括支援センターや健康課に依頼して健康体操や健康講話（夏には熱中症、冬にはヒートショックへの注意喚起など）を行ったり、演芸ボランティアに依頼して余興をしてもらったりと、地域ごとに様々な企画が行われている。

第二項 ふれあいランチサービス

ふれあいランチサービスは65歳以上の独居高齢者や70歳以上高齢者を対象に、在宅高齢者に対する地域支援システムの構築を図るとともに閉じこもり予防や要介護高齢者を発見する場とし、介護予防のための知識を普及し、実践する高齢者を増やすといった目的で1996年に開始した活動である。地域の集会所や空き家を利用して、昼食を取りながらふれあいや生きがいがづくりを行っている。

社会福祉協議会の第2期¹のモデル事業としてスタートした「シルバー談話室」も全市的

¹第二章第一節第三項参照。氷見市社協は発展の歴史を7期に分けており、第2期は1990年から1992年の期間である。

に展開されるようになり、更なる発展を求められるようになった。それまで、敬老の日を祝って市内の 80 歳以上の高齢者に敬老福祉金を 1 人 5,000 円ずつ配っていたが、このことについては民生委員協議会から課題提起をされていたこともあり、新たな地域福祉活動への財源を活用できないかということで、新たなサービスとしてふれあいランチサービスが企画された。

市の補助金を元に民生委員、健康づくりボランティア、老人会、地域のボランティアなど、地区社協が中心となってふれあいランチの運営を行っている。氷見市社協は直接的にそれらの活動の運営に関わるというよりは、体制の整備やサポートを行っており、実際の運営は地区社協に任せ、地域主体となって動いている。食事は業者の弁当を利用する地区もあれば、スタッフが調理して用意したり、食事の用意から高齢者が参加する地区もある。

活動頻度は地域によって異なるが、多い所では月に一回のペースで行われている。食事以外にも体操教室や交通安全教室などを行ったり、劇団を呼んだり、地域ごとに工夫して活動を行っており、氷見市福祉介護課によると、参加者の満足度は高い。参加者数も地域によって異なるが、平成 27 年度の市全体の延べ利用者数は 8,840 人になる。

第三節 個別支援型福祉活動への展開

ふれあい型の活動で見えてきた住民自身による個人ニーズへの対応として、地域住民による個別支援活動（ケアネット活動、配食サービス等）の実現と活動の過程をシステム化することによる専門職との連携を強化した。さらに個別支援活動から見えてきたニーズをふれあい型地域福祉活動へと発展させるために、常設型のふれあいサロンを設置した。

また、ケアネット活動の実践から見えてきた課題の柱に、ボランティアの要素の強い従来の見守り中心のケアネット活動から、生活を支えるための取り組みに対するニーズが増え、買い物支援や外出支援など、地域の実情に応じた活動が展開されるようになった。ケアネット活動対象者の中には公的サービス利用者が増え、対象者を支える住民と専門職の新たな連携システムが構築された。

第四節 独居高齢者支援の観点からみたふれあい型地域活動

第一章でも述べたように、独居高齢者は加齢とともに身体機能が衰えることによって生活範囲が狭くなり、引きこもりがちになることや、人間関係が狭くなり孤独感を感じるものが問題とされているが、氷見市が行っているふれあい型の地域活動は独居高齢者にとって意味を成しているのではないか。次の章では実際の活動を詳細にとりあげながら、氷見市での事態をみていきたい。

第三章 氷見市における活動の実態

第一節 朝日丘地区ふれあいランチサービス

2018年2月に行われた氷見市朝日丘地区の中の南大町という地区でのふれあいランチへフィールドワークを行った。朝日丘は氷見市の中でも市街地にあたる地区である。南大町地区は3つの旧町内が集まっていて、それぞれの旧町内で年に2回ずつ計6回、そして旧3町内合同のふれあいランチが年2回行われており、フィールドワークでは旧3町内合同のふれあいランチに参加した。

参加者は約40人で、そのうち男性は6人。日時や内容を事前にチラシで回覧して開催前に参加希望をとっており、参加者名簿が作られていて、スタッフは来た人を確認すると名簿に丸を付けて出欠をとっていた。参加者が払う会費は1人200円。それとは別に市から1人あたり300円の補助金、またそれに加えてふれあいランチの参加者の数に応じてさらに補助金がもらえる。今回のふれあいランチのスタッフは9名で、校区社会福祉協議会会長、民生委員2名、地域ボランティア6名で構成されており、スタッフの年齢は50～70代程に見えた。

今回の会場は光源寺で、お寺とつながっている建物の一室を利用していた。畳の広い部屋で、参加者には椅子が用意されていた。ふれあいランチの会場は参加者が歩いて来られる範囲内で用意されている。車も数台あったが、筆者が会場に到着した時にも歩いている参加者を複数見かけたので、ほとんどの参加者は歩いて会場まで来ているようである。

10時になると会長の挨拶から始まり、その後地域のこども園の園児（年長・20人程）によるお遊戯会が始まった。まずは園児たちが高齢者たちの前で事前に練習してきたと思われるお遊戯を披露した。手を振ったりたたいたりする振りがあり、始まる前に園の先生から「みなさんも一緒に手を動かしてください」との声掛けもあったので、一緒になって振りを真似して動いたり、手拍子をしたりする方もいたり、高齢者の方たちは楽しそうにしていた。その後は前にいた園児たちが各々高齢者たちの中に入って、いっしょに手遊びをしていた。これは歌に合わせて手で作った穴に順番に指を入れていき、歌が終わったときに指が入っていた人が勝ちという手遊びらしい。高齢者の方もこの手遊びを知っている方が多いようで、一緒に歌いながら楽しそうに遊んでおり、会場は大盛り上がりしていた。それが終わると最後に肩たたきのふれあい遊びをした。肩たたきの歌に合わせて、園児たちが参加者の肩をたたいていた。高齢者の方たちは園児にありがとうと声をかけたり、園児たちとの触れ合いを楽しんでいるようで、笑顔の方が多かった。肩たたきのふれあい遊びが終わると、園児たちは前へ戻り挨拶をしてお遊戯会は終わった。ボランティアから園児たちにノートのプレゼントがあり、その後園児たちは帰った。

お遊戯会が終わると5分のトイレ休憩をはさみ、その後氷見市健康課による健康教室が始まった。「冬の健康管理 ～元気に冬を乗り切ろう～」という題目で、スライドを使ってヒートショックやインフルエンザ、ノロウイルスなど、冬に起こりやすい高齢者の病気の説明とその予防についての話があった。

11 時頃に健康教室が終わり、ご飯の前にビンゴ大会をした。ここでビンゴカードが数人分足りないというハプニングが起きる。ボランティアの内の一人が家にビンゴカードがあると行って、自転車で取りに行った。そのビンゴカードが来るまで時間があつたので、その時間を利用して民生委員の人が前に立って簡単な脳トレ運動をした。運動をしていると5分ほどでボランティアの人がビンゴカードを持って戻って来たので、足りなかった人に配ってビンゴ大会がスタートした。景品は1等から最後まで全員分用意されており、盛り上がった。

その後高齢者は用意された椅子にそれぞれ座っている状態だったが、ご飯を食べるのでスタッフが机を並べてお弁当やお茶を配るなど、会場の設営に取り掛かった。男性の参加者は机を運ぶのを手伝ってくれたりした。ご飯を並べ終え、各々好きな席についたところで、食前の挨拶をして食事が始まった。

食事は業者の用意した弁当を利用していた。ふれあいランチではスタッフが作ったものを参加者に食べてもらう地区もあるが、そのやり方だとスタッフと参加者のふれあいがなくなってしまうので、朝日丘地区では業者の弁当を利用する事にしているという。用意された弁当は煮物や魚などの和食を中心としたメニューで、ほとんどの参加者の方が残さず全部食べているようだった。参加者は食事中も近くに座った者同士で話している様子だった。男性の参加者は男だけで集まって食事していた。みんなが食べ終わりしばらくしてから、食後の挨拶をして、昼食の時間が終わった。会長や民生委員の人はご飯を食べ終わったあとここで話していいですよと言っていたが、参加者は食事が終わった後一斉に帰宅した。

第二節 上庄地区ふれあいランチサービス

上庄地区は7つの地域に分かれているが、毎回7地域合同でふれあいランチを行っている。ふれあいランチサービスの会場は基本的に参加者が歩いて来られる範囲内で用意されているが、上庄地区は合同で行うため遠方の地域の参加者に対しては民生委員が送迎を行っている。

8月の参加者は約50人で、男性は7、8人程度であった。会費は300円で、朝日丘地区同様参加者の人数に応じて補助金をもらっている。自治体で申込用紙を配布し、申し込みがあった人が基本的には1年単位で参加する。

ふれあいランチのスタッフは民生委員7人、食事ボランティア12人で、進行は民生委員が行い、食事は手作りでボランティアが毎回用意している。上庄地区の食事ボランティアは、健康づくりボランティアと一般のボランティア合わせて今年度は計35人。毎月約15人ずつ交代でふれあいランチを担当している。20年前以上前からボランティアによる手作りで食事がふるまわれている。

筆者は8月に行われたふれあいランチサービスに参加してきた。会場は公民館の中の広い畳の一室で、台所とふすま一枚で繋がっている。食事ボランティアは朝8時30分頃から集まって準備を始めている。会場の設営が終わると、民生委員が集まってミーティングが始まった。ふれあいランチは7地域の民生委員が集まる機会にもなっているので、ボランティアが食事の準備をしている時間を利用して話し合いを行っている。話し合いの内容は、今月各自が参加してきた講演会や集会の報告、また今後の予定の確認などであった。

その後参加者も全員揃い11時からふれあいランチが始まった。今回は立教大学の実習生2人も参加していたため、実習生による健康体操や脳トレが1時間ほど行われた。12時になると食事が始まった。その日のメニューはカレーライス、サラダ、お漬物、ヨーグルトであった。参加者と民生委員が混ざって席に座り、各々会話を楽しみながら食事をしている様子であった。食べ終わった後は全員で合掌し、その後解散した。

上庄地区では参加者に楽しんでもらおうと、食事以外にもお寺の住職による法話や、詐欺対策教室、手品、オカリナ演奏会など毎月様々なことも行っている。

第三節 仏生寺地区ふれあいランチサービス

仏生寺地区は氷見市の中でも山間部に位置する地域である。参加者は仏生寺地区出身の民話ボランティアを含む 9 人で、全員女性であった。仏生寺の寺中地区では特別にボランティアを用意しておらず、参加者自身ですべての用意を行っている。準備や進行の中心は、この地域の世話役的存在である岩田さんが担っており、食事の買い出しや、包括センターへの報告書提出も岩田さんが行っている。

9 時ごろに会場に到着すると、岩田さんが出迎えてくれた。9 時 10 分ごろから食事の用意が始められた。時間が経つにつれて、参加者も集まり始め、最終的に食事は 5 人で作り、他の参加者は座敷で談笑していた。台所でもずっと話が盛り上がり、食事の準備をしつつ楽しみながら参加しているようであった。

11 時ごろには食事がすべて完成した。その日のメニューは混ぜご飯、マカロニサラダ、煮物、ほうれん草の胡麻和え、すり身の味噌汁であった。11 時 20 分から食事が始まった。食事を作っていない参加者の中には後片付けや皿洗いを担当する人もいて、まさに参加者全員で作らしているという印象を受けた。

岩田さんは、自分が参加者の高齢者のお世話をしているという感覚はなく、自分が楽しいからふれあいランチに参加していると述べていた。担当の市社協の役員は、仏生寺地区ではより隣同士の絆が強く、本人たちには支援者、被支援者の意識はないがうまく協力し合って生活していると話しており、その地域性がふれあいランチの様子にも表れていた。

第四節 ひとり暮らし高齢者安否確認・配食サービス

ひとり暮らし高齢者安否確認・配食サービスとは、ひとり暮らし高齢者の偏った食事を見直すことと、安否確認を目的として開始された事業であり、氷見市では始めて10年以上経つ。もともと配食サービスとしてやっていた事業を安否確認事業委託にして、市から補助金を出して行われるようになった。65歳以上のひとり暮らしの高齢者または高齢者のみの世帯で調理が困難な家庭を対象に行っており、利用者は一食450～471円（おかゆの場合500～523円）で1日2食まで利用できる。

利用者は担当のケアマネジャーや家族の勧めでサービスを利用し始める場合が多い。ひとり暮らしの高齢者や高齢者のみの世帯で、どうしても体の都合が悪い、自炊ができない、食事の栄養が偏るといった場合に勧められており、高齢者が自分から依頼して始めるというよりは周囲の勧めで始める場合が多い。

安否確認の方法としては、弁当の配達時に声かけを行っている。その際高齢者が不在であったときや、回収時に弁当が食べられていなかったときなど、異常を確認した場合は配達員が家族や地域役員（自治振興委員、民生委員など）やケアマネジャーなどに連絡、さらに必要に応じては救急要請や警察へ連絡を行っている。家の中で倒れていたり、ストーブの火が毛布に引火していたりと、実際に命にかかわるような事態に遭遇する場合も多々あるようで、万が一の事態を防ぐという意識で安否確認を行っている。

平成30年10月時点では男性29人女性57人の計86人がこのサービスを利用している。現在市ではシルバー人材センターと社会福祉法人万葉の杜の2つの業者に配達を委託しており、シルバー人材センターは担当者4人で1日12.5人（延べ12.8人）、万葉の杜は担当者2人で1日18人（延べ21.8人）を担当してサービスを行っている。地域ごとに分担はされておらず、それぞれ市内全域を範囲としており、利用者がサービスを利用する際この2つの業者から選択ができるようになっている。管理栄養士の監修のもと高齢者向けに調理された食事が配達されている。

第五節 ケアネット活動

ケアネット活動とは、小地域（氷見市内 21 地区社協）を単位として、1 人で生活していくことが難しい乳幼児からお年寄りを対象に、地域住民がチームを組み、住民でできる支援（声掛けや見守り、雪かきやごみ出しなど）を行う活動である。隣近所の関係希薄化の防止や若い世代へ福祉の関心を日常から醸成していくこと、支え合いの中から地域力を強化していくことが目的とされている。

氷見市では 2003 年から活動が開始された。開始時はケアネットの対象者が 123 人、活動者が 371 人であったが、2007 年までの 5 年間で対象者 492 人、活動者 1256 人まで増やし、その後年々対象者も活動者も増加している。2018 年では対象者 745 人、活動者 1894 人である。対象者のほとんどは高齢者で、その中でも 7 割が独居高齢者である。

支援が必要な人が発見されれば場合、民生委員が自治会長や地区社協会長と協力して支援内容の確認やチームメンバーの選定を行う。ケアネットチームの構成としては、昔ながらの隣近所の関係の延長でチーム編成を行う住民出来型と、既に公的支援を受けている当事者に対して専門職と地域住民が連携してチーム編成を行う専門職連携型がある。住民たちの見守りの中で何か異常を確認した場合はチームリーダーが市社協へ報告をし、必要な専門職へつないでいる。

第四章 分析と考察—活動実態からみえる氷見市の特徴—

第一節 独居高齢者の対するふれあいランチの効果

今回フィールドワークを行った 3 つの地区では、食事以外にも様々な活動を組み合わせることによって、高齢者が楽しめるように工夫されていた。社会とのつながりという点においてはふれあいランチのような会食サービスは、食事を通して他者との交流を図るなど地域とつながる機会となり、有効であると思う。実際に、食事中は参加者同士で食事を囲みながら楽しそうに話している様子であった。参加者のなかには開始の 1 時間前から集まり会話を楽しんでいる高齢者もみられ、ふれあいランチが地域の高齢者同士をつなぐひとつの場として機能しているように感じた。また、ふれあいランチでは食事だけではなく健康教室や交通安全教室などを行っており、集まって食事をする以外でも高齢者の生活に有益なものとなっている。

独居高齢者の問題点として、加齢に伴う人間関係の範囲、行動範囲の縮小が挙げられていたが、少なくともふれあいランチに参加している高齢者にとっては、ふれあいランチが外出目的の一つになっていることや、地域の高齢者との交流の場となっていることから、氷見市でのふれあいランチは独居高齢者の人間関係や行動範囲の縮小に対して有効である。

また、ふれあいランチは要支援者発見の場としても機能している。朝日丘地区民生委員の村上さんによると、いつも参加している人が来ていなかったときに、他の参加者から体調が悪くて病院に通っていることや、外に出ることが嫌になっていることなど情報が入る。そういった情報が入ると民生委員の仕事として訪問をし、何か困ったことがないか様子をうかがって、もし何か問題があった場合は行政や専門職につなげることができる。民生委員は自身もふれあいランチに関わることで参加している高齢者の様子を把握することだけではなく、間接的に参加していない高齢者に対しても情報をえる機会となっている。

第二節 行政と市社協・地区社協の相互協力

ふれあいランチは地区社協が中心となって行われている活動であり、各地区で民生委員やボランティアが主導となって行われている。第一節でも述べた通り、民生委員は担当の地区の高齢者に問題を確認した場合、必要となれば市の包括センターやサポートセンターに協力を求めることができる。また、市が主導となっているひとり暮らし高齢者安否確認・配食サービスでは、利用者に何か困りごとがあった場合は地域の役員に連絡が入るようになっており、そこから民生委員が実際に訪問して様子を確認することや、地区社協の協力のもとケアネット活動を展開する場合もある。

以上のように氷見市では、地区だけでは解決できない問題があった場合は行政が対応できるし、逆に行政の活動では届かない、身近な支援が必要な場合は市や地区の社協が中心となって地域で協力を行う体制が整っている。

第三節 まとめと考察

氷見市の地区社協の特徴は、地区レベルでの活動が活発であることであり、さらにふれあい型の活動も行うことで高齢者との対面的機会を増やしていることである。

高齢者との対面的機会は市の配食サービスも同様であり、ふれあいランチなどのふれあい型の活動に参加しない高齢者も、行政による訪問活動により孤立化を和らげている。行政、社協、ボランティアなど、重層的な高齢者へのアプローチがあることで、独居高齢者相対的に孤立しにくい状況になっている。

本研究では、氷見市の中でも比較的活動が活発に行われている地域を対象として調査を行なった。また今回は氷見市の取り組みの良い点を中心に記述したが、ボランティアの高齢化など今後の課題も残されている。今後も氷見市の展開を注目して観察していく方が良いだろう。

【参考文献・URL 一覧】

- ・小伊藤亜希子, 池添大, 斎藤功子, 立松麻衣子, 田中智子, 辻本乃理子, 中山徹, 藤井伸生, 増淵千保美, 2007, 「在宅高齢者の食生活を支える草の根型配食サービスの利点と課題」『日本家政学会誌』 58(12):781-793
- ・新宅賀洋, 下口愛未, 春木敏, 2014, 「地域在住女性高齢者を対象とする食事サービスの現状と課題」『栄養学雑誌』 72(5):251-261
- ・内閣府, 2017, 「平成 30 年度版高齢社会白書」
(http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html)
- ・原田正樹, 2014, 『地域福祉の基盤づくり—推進主体の形成—』中央法規
- ・氷見市, 2017, 「高齢者在宅福祉サービス」
(http://www.city.himi.toyama.jp/hp/kurashi/node_25312/node_1282/node_22322)

- ・氷見市社会福祉協議会 (社会福祉法人), 2017, 「氷見市社会福祉協議会の概要 平成 29 年度版」
- ・氷見市社会福祉協議会 (社会福祉法人), 2017, 「地区社会福祉協議会の概要 平成 29 年度版」
- ・氷見市社会福祉協議会 (社会福祉法人), 2017, 「地域活動の推進」
(<http://www.himi-shakyo.jp/chiiki-fukusi/suisin/>)
- ・廣瀬春次, 杉山沙耶花, 竹内あや, 馬場崎未絵, 2009, 「独居高齢者の生きがいに関する研究」『山口県立大学学術情報』 2:26-31
- ・松成, 恵, 2004, 「高齢者の楽しみ・生きがい—独居後期高齢者事例研究—」『山口県立大学生活科学部研究報告書』 30:67-75